

■ 編集だより

編集後記

日本精神神経学会学術総会で教育講演をご担当された先生には、後日、講演内容を総括して本誌にご投稿いただくように、編集委員会からご依頼させていただくのが通例である。昨年（第 112 回学術総会（幕張メッセ））における教育講演に関しても、本誌 118 巻 12 号（平成 28 年 12 月）から順次掲載が始まっている。プログラムの都合などで聞き逃した講演についても内容を知ることができるので好評である。昨年の学術総会では、PCN 編集委員会のご推薦をいただいて、「英語論文の投稿から受理まで：査読に対するレスポンスレターを重点的に」というタイトルで私に教育講演の機会が与えられた。初めて研究論文を英文誌に投稿しようとする若手の学会員を主なターゲットに想定した講演であったが、内容が精神医学に特化されたものではないので、学会終了後の編集委員会の席上、本誌上の論文にまとめることはご辞退申し上げた。そのような経緯もあり、昨年の教育講演に関連してこの場を借りて少しだけ述べることをお許しいただきたい。

学会初日の朝のプログラムに組まれた私の教育講演は、「日本専門医機構認定専門医更新の単位セッション」に指定されたことに助けられ、閑古鳥が鳴く状況だけは免れた。私は当日、同機構認定の単位システムに感謝した数少ない学会員のひとりであった。講演でお伝えしたかったことは、「査読者は決して書き手の行く手を阻む人々ではなく、書き手に協力して論文の完成度を高めてくれる有難い存在である」という点に尽きる。実際に査読を通して論文は良くなる。時に格段に良くなるものである。この点を理解すれば、おのずからレスポンスレター作成の心構えは方向づけられるもので、あとは冷静にひとつひとつ point-to-point response の作法を守って型どおりに書いていけば大丈夫、というお話をさせていただいた。その上で、査読文とそれに対する応答文の実例を紹介し、査読プロセスを査読者側の視点からも見せることによって、「学術的完成度を高める協力者」としての査読者の役割が浮き彫りになるように講演を組み立てたつもりである。ピア・レビューを通して世に問われる論文には、査読者の無償の貢献が存在するのである。

拙い講演を補完するために、講演の最後に与謝野晶子の歌を引用した。

劫初より つくりいとなむ 殿堂に われも黄金の 釘一つ打つ

劫初とは仏語でこの世の初めのこと。一読して下の句の力強さに心を奪われる歌である。「黄金の釘」に作者の矜持が溢れ出ている。しかし、この歌の真の価値は、遠い昔から多くの人々によって連綿と積み重ねられてきた芸術の集合体（われわれに置き換えれば学術の集合体）を「つくりいとなむ殿堂」と詠みきったところにある、と私は思う。1 つの論文の著者も査読者も等しくこの殿堂に寄与していると思えば、査読プロセスをぐっと豊かなものと感じられるだろう。さあ、黄金の釘なり真鍮の釘なり、また打ち込もうではありませんか。

布村明彦